「阿波踊り」の様式化と異装の変容

明治大学　小林敦子

[研究の背景]

「阿波踊り」は藩政期より続く徳島城下の盆踊りであり、和楽器奏者と踊り手を擁する多数の連と呼ばれる集団が、路上を歩きながら踊る行進型である。踊りの振りに決まりはなく、男女差の希薄な老若男女の自由な乱舞とされ、僧侶や乞食に扮する仮装や異性装も行われていた。昭和初年代からの観光政策では、異装や洋楽器を禁じ 1 つの集団を十人以上とする等の基準による審査場が設置された。後に連は観光客向けの桟敷席を設けた演舞場を中心に踊るようになり、戦後は様式化された統一的な群舞となった。現在ジェンダー性の明確な「女踊り」、「男踊り」、「女ハッピ踊り」（ハッピ装の女性）の 3 つの様式が確立している。

[研究の目的と方法]

本研究では、異性装である男装の女性による踊りが「女ハッピ踊り」として様式化する過程を辿り、「女ハッピ踊り」における踊りの動作とジェンダーの流動性を提示する。さらに「女ハッピ踊り」と戦前まで行われていた異装を比較し、様式化された「阿波踊り」において異装の機能がどのように変化したかを明らかにする。研究方法は、新聞等の「阿波踊り」に関する記事における言説の分析、写真および映像の調査、「阿波踊り」公演の観察および実践者へのインタビューである。

[様式化以前の「阿波踊り」における異装]

異装に関する禁止政策は、藩政期および明治維新初期にすでに行われていた。さらに徳島観光協会は 1936 年の「阿波踊り」集団の審査基準に「服装は古典的のもので整備をしたもの」という項目を定めた。『徳島日日新報』等の新聞記事には度々異装に関する記事があり、男性の女装、女性（主として芸妓や娼妓）の男装、袈裟による僧侶の扮装、襤褸をまとっての乞食の扮装により巡査から咎められたことが記され、特に女性のハッピ姿は大腿部の露出などが厳しく批判されている。禁止にも関わらず行われる仮装は人々のエネルギー源であり、滑稽性を表現したいという動機に基づいており、日常のあたりまえの規範を打ち破る機能があったと考えられる。

観光政策開始時の異装の取り扱いについては、興味深い変更がある。徳島商工会議所は 1928 年に盆踊りを観光化すべく新聞を通して「秩序ある踊り」を要請した。ところがこれが裏目に出て踊り手が少なかったため、同年秋の「置市四十年」及び「御大典記念」の祝賀では風俗を乱さぬ程度という条件で紛争が許可されたところ、全市が賑わった。しかし観光客が増加するにつれ再び異装が下品であるという批判が起こり、1936 年の審査基準により禁じられることとなった。

[「阿波踊り」の様式化]

戦争による中断を経た「阿波踊り」は、特に女性の踊り手に女性らしさやセクシュアリティを見出す視線が形成され、「見られる踊り」という意識が踊り手にも生まれた。1960 年代後半に女性の踊りの足運びが内輪の爪先立ちとなり、男性とは異なる「女踊り」として確立する。「女踊り」は列を揃え動作も統一化されていき、1980 年代には歩数、進行方向、動作のタイミングなどを予め定めておく整然としたフォーメーションが導入された。男性の踊りも 1970 年代より自由性を残しながらも連内で統一化され、フォーメーションを組むようになった。「女踊り」は「優美でしなやか」であり、「男踊り」は「豪放で力強い」とされ、ジェンダーの差異が明確に表現されている。「男踊り」の踊り手は幅広い年代だが、「女踊り」は十代後半から三十代が主力であり、年齢制限を設けている連も多い。一方 1960 年代後半より、着流し（男性用浴衣）あるいはハッピによる男装の女性が増加し、「女の男踊り」と呼ばれた。男装の女性は男性に混じって踊ることが多く、身軽な衣装で「男踊り」の自由性を享受していたと考えられる。またこれらの女性の男装が「異装」として非難されることはなく、肌の露出によるセクシュアリティに好意的な言説が多く見られる。

[「女ハッピ踊り」の確立と多様化]

さらに女性の男装の内ハッピを着て踊る女性は男性から独立して 1 つのパートとして踊ることが標準となり、2000 年代には「女ハッピ踊り」という呼称が定着した。「女の男踊り」は女性が「男踊り」そのものを踊ることが特徴とされたが、「女ハッピ踊り」の踊りの動作は連によりかなり異なる。「男踊り」の特徴を踏襲する連もあるが、足を外輪どころか内輪気味にし「女踊り」同様の動作のしなやかさと統一性と整然としたフォーメーションを特徴とする連もあり、多様化している。しかしいずれの場合でも様式化した「阿波踊り」に適合しており、大正期の異装に見られた滑稽味や諧謔性は見出されない。また当初中年以降でも許容された「女ハッピ踊り」は現在十代後半から三十代前半までが主力となり、「女踊り」以上の若年化の傾向がある。踊り手に人気の理由は、「男踊り」が踊れる、「阿波踊り」の花形で注目される、また「女踊り」より衣装が楽であるからという理由が実践者から見出される。様式化されジェンダー性が強化された「阿波踊り」においては、異装であるはずの「女ハッピ踊り」が、「男踊り」の衣装の身軽さや「女踊り」にはない踊りの自由性を享受することで「阿波踊り」における女性としての規範を打ち壊している側面もあるが、「女踊り」の特徴の要素を取り入れ、むしろ規範を強化している面もあると考えられる。

「阿波踊り」の様式化と異装の変容　　配布資料「第 72 回舞踊学会大会」研究発表

2020.12.5　明治大学　小林敦子

本研究は「阿波踊り」（徳島市の盆踊り）における異装を対象とし、昭和初期に観光政策が開始され様式化された「阿波踊り」における男装の女性（異装）と、明治および大正期に行われていた異装を比較し、その機能の変化を考察した。特に、様式化以前の僧侶や乞食の扮装では滑稽味や諧謔味が表現されていたこと、異装は庶民が盆踊りに参加する意欲の源であったこと、様式化された「阿波踊り」では女性の男装も様式化の方向に進み異装とはみなされなかったこと、男装の女性の踊りは当初は男性の踊りを踏襲していたが、連によっては女性の踊りの特徴の要素を取り入れるようになり、多様化した点に着目した。異装には「あたりまえの規範から解放される」機能があると考えられるが、様式化された「阿波踊り」における男装の女性は、衣装の身軽さや女性の踊りにはない自由性を享受する側面があるが、連によってはジェンダー性が強化されている側面があると結論した。

引用・参考文献

・朝日新聞徳島支局，　1992，『阿波おどりの世界』，朝日新聞社
・ゑびす連，1999，『ゑびす連 50 周年記念』，ゑびす連
・服部幸雄，1992，「変身憧憬」，『変身する 仮面と異装の精神史』，国立歴史民俗博物館編，平凡社，61-110
・石井達朗，2003，『異装のセクシュアリティ』，新宿書房
・小寺融吉,1975（=1941），『民俗舞踊と研究』，図書刊行会，（『郷土舞踊と盆踊』復刻）
・神河庚蔵，1973(=1915)，『阿波國最近文明史料』第四巻，京都： 臨川書店
・三原宏，1976，『阿波おどり実記』，三原武雄（発行者）
・森田貴子 2005，「違式註違条例」，『歴史と地理 世界史の研究』，山川出版社，34-39
・中村久子,1996,「阿波踊り起源説について」,『徳島大学総合科学部人間科学研究 』4，徳島大学総合科学部，23-36
・下川耿史，2011,『盆踊り ： 乱交の民俗学』，作品社
・関口寛，2007,「昭和初期・徳島における観光産業振興と阿波おどり」，『凌霄』(14)，四国大学附属図書館編・発行，1-23
・高橋啓・小川裕久編，2007,「阿波おどり関係史料集（抄)」,『阿波踊り―歴史・文化・伝統』（阿波おどりシンポジウム企画委員会編集，第二十二回国民文化祭徳島市実行委員会事務局　発行）付録，132-143
・徳島グラフ編集室，2007，『徳島グラフ 2007』，徳島：徳島出版株式会社
・徳島県警察本部（徳島県警察史編さん委員会）編，1965，『徳島県警察史』，徳島県警察本部
・著者不明,1817-1818,『阿波國風俗問状答』，「阿波おどり関係史料集（抄)」（高橋啓・小川裕久編，2007，『阿波踊―歴史・文化・伝統』付録，第二十二回国民文化祭徳島市実行委員会事務局発行，132-142）から重引